

いろは文字 鐺くさう (その二十一—廢都二詠)

河尻成泰 ㊦

いろはにほへと ちりぬるを 色は匂へど 散りぬるを  
わかよたれそ つねならむ 我が世誰ぞ 常ならむ  
うゐのおくやま けふこえて 有為の奥山 今日越えて  
あさきゆめみし ゑひもせず 浅き夢見じ 酔ひもせず

(二)

一 近江あふみの荒れたる都を過ぐる時、柿本朝臣人麿かきのもろのあやみひてりまろの作る歌

玉櫛たまみ 畝火うねびの山の 檀原かしはらの 日知ひじりの御代みよゆ 生あれましし 神かみのこごと 櫨つがの木の  
いやつぎつぎに 天あめの下 知らしめししを 天そらにみつ 大和やまとを置きて あをによし  
奈良山を越え いかさまに 思おもほしめせか 天あま離りる 夷ひなにはあれど 石い走はる 淡海あふみの  
国くにの 楽浪たかなみの 大津おほつの宮に 天あめの下 知らしめしけむ 天皇すめらみの 神かみの尊みことの 大宮おほみやは  
此処こゝと聞きけども 大殿おほほらは 此処こゝと言ことへども 春草はるぐさの 繁しげく生なひたる 霞かすみ立ち 春日はるひの  
霧きりれる ももしきの 大宮おほみや処ところ 見みれば悲かなしも (卷一—二九)

厳いかしき所 楼始ろうまるは

晴うねびれの畝火うねびに 和魂にきたまの顔

秀ほつ檀原かしはらへ 碧天へきてんの如ごと

豊とよの国くにの地 地やまとは大和やまとなり

綸命りんめい発しぬ

幣ぬさ向かへき反る

累代るいだい在るを

遠方をちかたに神酒みわ

和なの奈良山ならやまか

かの山越えよ

よき京みやこまた

玉波たまなみもあれ

漣れんざなみ楽浪そ

その宮大津おほつ

続く浪なみの音

音ねをば忘るな

など宮柱みやばしら

落日らくじつに染むし

空むなし景勝

移ろふ世よの威ゐ

偉器ゐき天皇すめらみの

法のりは絶えおほ

生おひ草繁く

暮れ行く春や

破やれ垣がきの様

磨まろは心泣うらなけ

二 春の日に、三香の原の荒れたる墟あちを悲しび傷みて作る歌一首

三香みかの原 久邇くにの都は 山高く 川の瀬清し 住みよしと 人は言へども 在りよしと わ

れは思へど 古ふるりにし 里にしあれば 国見れど 人も通はず 里見れば 家も荒れたり

愛はしけやし 斯かくありけるか 三諸みもろつく 鹿背山かせやまの際まに 咲く花の 色めづらしく 百鳥ももどりの

声なつかしく 在りあが欲ほし 住みよき里の 荒るらく惜しも (巻六一一〇五九)

けふ  
今日まで称ふ

ふ  
古りにし京

かはせさ  
ここ川瀬沓え

せよ  
枝葉戦ぎて

照る夕日あ

かせやま  
あの鹿背山さ

さこそ住みよき

くに  
清き久邇消ゆ

行く春惜しめ

め  
愛づる里を見

みか  
三香の原憂し

しはうさぶ  
四方寂しゑ

ゑ  
笑む花に酔ひ

日日鳴く鳥も

物を偲はせ

せきはくかも  
寂寞醸す

すべてはこれ無……

(平成三十年六月十四日)

近江大津宮おうみのおおつのみやⅡ滋賀県大津市。天智六年（六六七）大和から遷都。天智、弘文二代の都。天武元年（六七二）壬申じんしんの乱に天智方は敗れ、都は飛鳥に還り、荒廢。今、大津市錦織にしこおりに調査発掘された遺跡が点在している。本歌で人麻呂が「いかさまに 思ほしめせか（どのようにお思いになったからか）」と言っているが、天智天皇のこの遷都は民衆には不人氣だったのか、日本書紀天智六年条に、「…都を近江うつに遷す。是この時に、天下あめのしたの百姓（一般人民）、都遷すことを願はずして、諷そへ諫あざむく（それとなく指して思うままのことを勝手に言う）者多し。…」とある。

久邇宮くにのみやⅡ京都府木津川市加茂町。続日本紀では恭仁宮くにのみや。天平十二年（七四〇）十二月、聖武天皇は平城京（奈良）からこの地に遷都。木津川（泉川）が東西に流れている。（百人一首の「みかの原 わきて流るる いづみ川…」の泉川）。しかし、天皇はわずか三年余り後の十六年、恭仁く、難波なのいずれが良いかと官人、市人に問い、官人は小差ながら、市人は圧倒的に恭仁を支持したが、二月「難波宮を皇都とす」の勅が出され、恭仁はこの歌を持つ運命となった。（翌年紫香樂宮（滋賀県甲賀市）、さらに平城京へと、この頃聖武はめまぐるしく宮を変えた。）恭仁宮跡は木津川の北、恭仁小学校の隣、鹿背山かせやまは川を隔てて南西にある。

【本歌一】柿本人麻呂、万葉集初登場の歌。天智の旧都近江大津宮を詠んだ。廢都を目の前にし、自然の不変と人の業わざの果敢無さを歌う。枕詞をリズムよく駆使しているところ、技巧にも長けた人麻呂の真骨頂。神話や歴史を織り交ぜ重厚莊重な歌風を築く。

玉櫛たまなぐきⅡ「たすき」の美称。うなじに掛けるので「うね」「うな」にかかる枕詞。

檀原かしはらⅡ奈良県檀原市。第一代神武天皇の即位の地とされる。畝傍山うねびやまの南東すぐのところが檀原宮の旧址とされ、檀原神宮がある。（…観みれば、畝傍山うねびやまの東南の檀原かしはらの地は、蓋けだし国の壘もなかのくし区（中心地）か。治みやこづくるべし」とのたまふ。日本書紀神武天皇即位前紀）  
檀原かしはらの 日知ひじりの御代みよゆひじりⅡ日知は日を領治するの意で天皇。ゆは、よりに同じ。神武天皇の代から、の意味。

樛つがの木つがの いやつぎつぎにⅡ（樛つがの木つがのように）次々に。「樛つがの木つが」は類音によってつぎにかかる枕詞。

天にみつ 大和を置いて 大和を捨てて。「天にみつ」は大和の枕詞。「そらみつ」が一般的であったが人麻呂はにをいれて五音で音調を整えた。「そらみつ 大和の国は おしなべて われこそ居れ：」巻一―二

奈良山 奈良市北方の丘陵。

石走る 枕詞。水が岩の上を激しく流れることから、滝、垂水、また近江にかかる。

楽浪 琵琶湖西南岸地方の古名。のをつけて大津、志賀、比良などの枕詞。神樂のはやし言

葉ささから神樂をささと読み、楽浪は神樂浪の一文字略の表記だそうだ。

ももしきの 枕詞。多くの石や木で造った意で、大宮にかかる。

### 【文字鉤の歌】

初句「厳しき所」から八句「地は大和なり」までは橿原の地に都がおかれたこと。

九句「綸命発しぬ」から「その宮大津」までは歴代天皇の皇都があった大和から大津へ天智

天皇が都を遷したことを。

次の「続く浪の音」から最後は廃れた都の姿と人麻呂の感慨。

厳しき所 いかめしい、おごそかな所。

楼始まるは 楼は楼閣、高殿で、宮殿が出来て神武天皇の世が始まったことを指す。

和魂 柔和な神霊、靈魂、和御魂。対は荒御魂。最初の天皇を温和とした。

秀つ 橿原へ 秀はひいでているもの、ぬきんでているもの。素晴らしい土地橿原へ。

綸命 天子の命令。綸言。

幣向き 天皇の遷都の命により、神に祈り捧げる幣は新都の方に向いた。

累代在るを 神武以来歴代大和に宮があったのに。本歌の「いやつぎつぎに」に対応。

(参考) 宮の場所はほとんどが大和(奈良県内)であったが、大和以外の地では古事記

によれば十三代成務天皇の宮は近つ淡海(滋賀県)の志賀の高穴穗宮であり、次の仲哀

天皇は筑紫訶志比宮(福岡県香椎)、仁徳天皇は難波高津宮、下つて天智の二代前孝徳

天皇も難波長柄豊碕に遷都した。

遠方に神酒 是るか遠い鄙に神酒を供える。「幣向き反る」と同じく実景というより象徴的

に述べたもの。

玉波もあれ 波の美称を使ってみた。もちろん琵琶湖の波。

漣楽浪そ その宮大津 漣は訓読みでさざなみ(古くは清音)。この一行には言葉遊びの気

配あり。

など宮柱 落日に染む 王宮の衰微。「など」は、なにゆえ、なぜ。

偉器 すぐれた器量（の人物）。

破れ垣の様 宮殿の周りの立派な垣の荒れ果てた様子。

磨は心泣け 心泣く は心の中で自然と泣けてくる。うらは心の意。おもてに対してうら

は見えないから、心をいう。「うら悲しい」「うら寂しい」「うらぶれる」など。ここは命

令形ではなく、現代語の「泣ける」にあたる下二段活用の連用形。「心のなかに自然と

泣けてきて：。」 磨は人麻呂が自分を指して「われ」「わたくし」。

【本歌二】人麻呂ではない。田辺福磨の歌集から。田辺福磨は卷十八冒頭に越中守家持の館

で詠んだ歌が十三首ある。あとは彼の歌集から三十一首採られている。この本歌はその

一つ。対句を流れるように使って技巧派宮廷歌人の歌いぶり。この直前には「久邇の新

しき京を讃むる歌」が載っている。

山高く 川の瀬清し 鹿背山と泉川。

愛しけやし ああ、あわれ、いとおしい。

三諸つく 鹿背山の際に 三諸は神が宿る場所、また、神を祀る神座。「みむろ」とも言う。

神座である鹿背山の間。

色めづらしく めづらし はすばらしい、好ましい。「愛つ」（愛する、賞美する、心がひ

かれる）から。

百鳥の 声なつかしく 多くの鳥の声も慕わしい。

在りが欲し そこにいたい。見が欲しは見たい、見ていたい。

### 【文字鋤の歌】

四方寂し ぎぶし 「さぶし」は「さびし」の古形。これまでであった生氣や活気が失われて、ひっ

そりしている。ゑも上代語で感動、詠嘆を表す。寂しくてため息をついている様子。

「山の端に あぢ群騒き 行くなれど われはさぶし 君にしあらねば」（卷四―四

八六）というのがあった。

（平成三十年六月二十一日）

「その十九」で人麻呂に触れ、その続編としては近江大津宮の歌は、人麻呂の最初の歌であるから、是非とも思っていた。問題は、その他の歌をどれにしようか。数首選んで作り出してみたがどうもしっくりこない。なかなか手にならない。

思いあぐねていたところ、三香の原の歌に思い当たった。よし、これだ、これを大津の歌と並べよう、廃都を詠む両者、これでよかろうと決めた次第。万葉集の中で燦然と並び立つ秀歌二首、というわけではないだろうが…。

人麻呂の近江京を偲ぶ歌としては「淡海あふみの海 夕波千鳥 汝なが鳴けば 情こころもしのに 古思いにしへほゆ」(巻三十一・二六六)も忘れられないが、かつて「その十二」でこの歌をイメージして作った。

(付) 本歌二首にはそれぞれ反歌がある。次の通り。

ささなみの 志賀からさきの辛崎さき 幸さきくあれど 大宮人おほみやひとの 船待ふねちかねつ (巻一―三〇)

ささなみの 志賀よじの大わだ 淀よどむとも 昔むかしの人に またも逢あはめやも (巻一―三二)

三香みかの原 久邇くにの京みやこは 荒あれにけり 大宮人おほみやひとの 移うつろひぬれば (巻六―一〇六〇)

咲く花の 色いろはかはらず ももしきの 大宮人おほみやひとぞ 立たち易かりける (巻六―一〇六一)

(平成三十年六月二十一日)